

科からの歯科医師派遣の終了に伴い、歯科で管理されていた唇顎口蓋裂患者の引継ぎを行った。そこで、太田総合病院附属太田熱海病院で引継ぎを行った口唇・口蓋裂患者、および形成外科からの紹介患者の概要について報告する。太田熱海病院歯科からの引継ぎは3月に3日間、4月に2日間の5日間、太田熱海病院歯科外来にて行った。引継ぎ患者数は59名。現在までの来院数は44名。未来院は15名であった。さらに、太田熱海病院形成外科からの紹介患者は3月から9月までの間で、22名。月平均紹介患者数は3.1人であった。廣瀬らの報告によると、1998年10月から2003年9月までの5年間における当科の口唇・口蓋裂患者の来院数は50名。月平均患者数は0.8人であった。

太田熱海病院口蓋裂センターにおける口唇・口蓋裂患者については、歯科、形成外科、耳鼻咽喉科、言語療法科、臨床心理室、医療社会福祉部、栄養部、看護部の8つの部署で連携をとり管理を行っている。

さらに矯正治療については、平成17年4月までは昭和大学歯科病院矯正歯科より矯正科医を派遣し実施されていた。

まとめ1) 口唇・口蓋裂患者の引継患者数は59名、形成外科からの紹介患者は22名であった。2) 当科の口唇・口蓋裂患者における1か月の来院患者は、0.8人から3.1人に増加した。3) 太田熱海病院口蓋裂センターとの医療連携を開始したことで、言語療法を含め医科との密接な関係を築くことができた。

短期間における急激な難症例増加と形成外科からの紹介患者増加が今後予測されることから、矯正歯科における診療体制の強化が必要となる。

今回の発表にあたり、本学を引継ぎ先を選択していただいた太田熱海病院の口蓋裂センターの関係各位、ならびに昭和大学矯正学講座 榎宏太郎教授に厚く御礼申し上げます。

5) 顎関節症患者の臨床的検討

○丹治 祥大, 浜田 智弘, 小坂橋 勉, 宮下 照展
菅野 勝也, 馬庭 暁人, 金 秀樹, 宮島 久
高田 訓, 大野 敬
(奥羽大・歯・口腔外科, 会津中央病院歯科口腔外科)

顎関節症は、近年、食生活の変化や社会的ストレスの増加に伴い患者数は増加傾向にある。そこで今回われわれは平成16年4月から平成17年3月までの1年間に当科で治療を行った顎関節症164例、203関節について検討した。

平均年齢は35.2歳で20歳代が最も多く。男女比はおよそ1:1.7であった。主訴は開閉口時痛が約半数を占め、次いで開口障害、関節雑音の順であった。初診時開口量は平均が39.8mmであり、病悩期間は平均が773.5日であった。治療方法は家庭療法のみが最も多く、次いで薬物療法、理学療法、スプリント療法の順であった。治療期間は平均が32.0日であった。全164症例で片側顎関節症が125例、両側顎関節症が39例で両側が同一症型であったものが30例、同一でなかったものが9例であった。全203関節を症型別に分類するとⅢa型が最も多く、次いでⅠ型、Ⅲb型、Ⅱ型、Ⅳ型、Ⅴ型の順であった。Ⅰ型は主訴の83%が開閉口時痛であった。Ⅱ型は他の症型より初診時開口量が最も大きく、病悩期間および治療期間が最も短く、主訴の90%が開閉口時痛であった。Ⅲa型は他の症型より病悩期間が最も長く、主訴の内訳に関節雑音の割合が最も多かった。Ⅲb型と通じて治療方法にスプリント療法を用いている割合が他の症型より多いのが認められた。Ⅲb型は他の症型より平均年齢が最も低く、初診時開口量が最も少ないことから主訴である開口障害が60%であった。Ⅳ型は他の症型より平均年齢が最も高く、主訴は開閉口時痛と開口障害のみであった。

当科における顎関節症患者の治療法は全て保存的療法であったが、ほぼ全ての症例において症状の消失あるいは改善が認められた。

6) Twin block applianceを装着したタッピング時の顎顔面頭蓋軟組織表面温度および脳活動

○中村 真治, 氷室 利彦¹, 福井 和徳¹
(奥羽大・歯・顎顔面口腔矯正学,
奥羽大・歯・成長発育歯¹)

【目的】機能的矯正装置を適用する時に構成咬合を与える目的は、固有感覚受容器からの反応によって顎顔面頭蓋軟組織を活性化することにある。